

帰宅部オーバーワーク！

大塚ガキ男

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

入学式後に、学生証を人質に取られ『帰宅部』という部活に入部する事を余儀なくされた、主人公前野。本来ならば、部活に所属していない者の事を指す言葉である『帰宅部』。しかし、この学校には部として『帰宅部』が存在していて。しかも、他の部から好ましく思われていないどころか、生徒会からメチャクチャ嫌われていて――

「何で帰宅部なのに壁を走らなくちゃいけないんですか!」

高身長ハーフ馬鹿、ベネディクト。

極悪茶髪部長、古泉。

そして、主人公の貧乳三つ編み眼鏡、前野。

時にタクシーを使い、時に他所様の家の塀を走り、時に生徒会とバチバチにやり合いながら、『帰宅部』の4人が今日も行く。

目次

- 帰宅部一同は帰宅できない。上。 1
- 帰宅部一同は帰宅できない。中。 15
- 帰宅部一同は帰宅出来ない。下。 29

帰宅部一同は帰宅できない。上。

「馬鹿なの!?!」

? 帰宅部部屋にて、前野まえのがトレードマークでありチャームポイントである長い三つ編みを振り乱しながら（なんなら眼鏡も掛けている前野だが、前野的には眼鏡は別に魅惑チャームでもなんでもないらしい）叫んだ。

? 「な、何がでしょうか」

? 前野の叫びに応えたのは、帰宅部所属の二年生——青山だ。群青色の髪色をキツカリと七三分けで揃えている。学園内では、その柔らかな物腰と紳士的な行動によつて、女子からの絶大な人気を博している。光を全反射する眼鏡が今日も瞳を覗かせない。

ちなみに、前野も青山と同じ二年生。青山とはクラスこそ違つたが、良好な関係を築いてきた。眼鏡同士、気が合ったのかも知れない。……まあしかし、仲が良い相手にも、真面目なトーンで「馬鹿なの!?!」とは言わないだろう。? しかし青山は、そんな前野の暴言染みた発言は些細な事だと言わんばかりに読んでいた（難しそうな）本を閉じて、前野に椅子ごと向き直る。

? 「これですよこれ! 新入生歓迎用のポスターですよ!!」

? ズバアツ! と前野が一枚のポスターを青山の眼前に突き付けた。勢いに押されて少し後ろに仰け反った青山は、その際にズレた眼鏡のフレームを直しながらポスターに書かれた文字にピントを合わせる。? そこには、こんな内容が。

?? 『帰宅部というだけで、誰かに馬鹿にされた事は無いか? 帰宅部というだけで、部活動所属者から理不尽な誹りそしを受けた事は無いか?

? 俺はそんな帰宅部同難達の無念の思い、怒りを尊重する。

? 今年度から、帰宅部を正式な部活にした! 同好会ではない! 部活動だ!

? 新入部員募集』??

「おかしいでしょー!」

? ポスターを引き千切り、前野がもう一度叫んだ。

絶叫した。

? 「前野さんが怒ってらっしやる理由が分からないのですが……?」

「なんでこのポスターちよつと格好良いの! ポスターなら、『見易く』『覚え易く』『分かり易く』が鉄則でしょうが!!」

? そうだったのか。

ポスター作りの経験が無い青山は、確かに、その方が通りすがりでも興味を惹きやすいかも知れない。と、頭の中で感心する。しかし、前野がたった今破いたポスターを製

作した人物の顔を思い出すと、前野の意見を全肯定する訳にもいかない青山なのだった。

？「やり直しだよやり直し！」？

「……、分かりました」

しかし、反論したらしたで前野の怒りを買うのは明白。青山は取り敢えず前野の言う事を聞くことにした。

？「何か思い付いたら私に言つて。審査するから」？

「出来ました」？

「早くない？ 考える時間なんてほとんどなかったよね？」？

「僕のIQを駆使すれば、名案の一つや二つ——何の苦でもないのですよ」

？ 毅然と（よく分からない不思議なポーズをしながら）言つた青山に、前野はIQ凄

い……！ と小学生みたいな感想を呟く。

知能指数

？ ポスターの案を出す程度で自身のIQを誇るその姿は無視させていただくとして。

？ 「じゃあ、教えてよ」

？ 青山の毅然とした態度と不思議なポーズに気圧されてか、青山に問う前野の声が少し上擦った。

その言葉に対して青山がまたもや眼鏡のフレームを直すと、前野は名案を予感した。

ごくり、と前野の細い喉が鳴る。

「『帰宅部というだけで、馬鹿にされた事は無いか？ 帰宅部というだk——続きはWe

bで!』とかどうでしょうか?」

「その回答のどこが名案!?!」

? 「最近の学生はスマートフォンやパソコンが大好き、という言葉を以前ラジオで耳にしたので?」

「うん、でもね、青山君」

? 「はい」?

「そもそも帰宅部のWebサイトとか無いから」

? 怒りを通り越して、前野は呆れた。本当に青山は学年トップの秀才なのだろうか?

と思わず疑問に思ってしまう程に。

? 「古来から人類は、数多の物を創造し、開拓してきました」

? 「あ、勝手にWebサイトを作ったりするのは駄目だからね」

? 「(。(。))」?

「はいそこ驚かないの!」

? こんな感じで、頭も時間もほとんど使わずに楽しく(?)会話していた前野と青山。

しかし突然、テーブルの上に置いてあった青山の携帯が震えて会話が途切れる。放課後

だというのに、律儀にもマナーモードにしていたらしい。

? 「電話ですね、失礼します」

? 「うん、どうぞ」

前野に断りを入れてから席を立つ青山。部室のドアの方へ離れて行き、パカリとガラケーを開いて通話ボタンを押す。

? 「はい、青山です。……はい、ええ。……分かりました。では、そのように。失礼します」

青山がガラケーを閉じたのを確認すると、前野が「どうしたの?」と問い掛ける。その際に青山が後ろ手に部室の鍵を内側から締めていたのだが、前野は気付かない。

通話を終えた青山の表情が、いつものクールな表情の三割増しで険しさを増していたものだから、前野は少し不安になる。

「……前野さん」

「何?」

「どうやら、まだ帰宅することは出来ないようです」

何で?

前野がそう問おうとした瞬間、部室の入口が揺れた。

ドンドン、と。

廊下の方から、殴るように。

鍵は青山がつい先程施錠したので、外側にいる部室に入ろうとしている人間には開ける事が出来ない。

「な、何なのいきなり。ビックリしたなあ」

前野が一瞬肩を跳ねさせる。そんな前野を見た青山が、

「逃げましょう、今すぐに。もうそこまで来てしまっています」

「来てしまっている、って何が？ 私まだ何も把握してないんだけどー」

狼狽えながら三つ編みを揺らす前野。青山がそんな前野の両肩を掴んだ。それから言い聞かせるように、ゆっくりと言う。

「生徒会です」

同時に、部室のドアが吹き飛んだ。

前野の甲高い悲鳴が響き渡り、舞い上がった埃によつてできたカーテンの向こうに、人影が四つ。

「帰宅部共オ！ 今日という今日は許さんぞー！」

やがて埃のカーテンは霧散し、人影の正体が露わになる。四人の内の一。ガタイの良い男が前に出て怒鳴った。

「これはこれは、生徒会役員の副会長さんではありませんか。どうかなさいましたか？

何やら常ならざる御様子ですが」

慇懃無礼——なのかは、発言した青山以外には知り得ぬ事だが、その発言によってガタイの良い男、副会長の怒りのボルテージが上がってしまったのは事実。副会長は更に一歩前に出た。

「部長を出せ！ 古泉だ！ アイツをひっ捕らえて、ついでに貴様等諸共停学にしてやらんと気が済まんツ!!」

「古泉先輩でしたら、今は不在です。日を改めてはいかがでしょう」

怒鳴り散らす副会長と、あくまで冷静に、落ち着いて対応しながらさり気無く帰らせようとする青山。前野が何も出来ずにオロオロしていると、コンコン。後方から微かにノック音が聞こえてきた。しかし、後方は窓。ノック音なんて聞こえてくるはずがないと思いつつも後ろを振り返ってみると、

「べ、ベネダイクト君!」

帰宅部三年生、ベネダイクトが窓の外に立っていた。校舎の出っ張りに足を乗せ、ニコニコと笑いながらノックを続けている。ちよつと怖い。

『開けて』

綺麗な金髪が風に揺られている。幼さの残るベネダイクトの笑顔と、身長190cmを超えるスタイルも相まって、そこだけ切り取れば何とも絵になる場面だったのだろう

が、ベネディクトが立っているのは窓の外。帰宅部の部室は3階なので、前野からしてみれば危うさしか感じていなかった。ベネディクトが恐れを抱いたりしない、能天気な性格なのも逆に危うさを助長させているのかも知れない。

何やってるんですか！

前野が慌てて窓を開けると、ベネディクトは軽い身のこなしで宙返りを決めてから帰宅部の部室の床に着地する。

土足のままで。

いつも部室内を掃除している青山の心労が増えた瞬間だった。

「いや〜、今日は暑いね〜！」

「爽やかな笑顔で言ってるけど、多分その汗は冷や汗だと思うよ!?!」

能^ア天気なベネディクトなら、もしかするとただの汗だったりするのもかも知れない。

ここにきてようやく、副会長もベネディクトの存在に気付いたようで「ベネディクト！ お前どこから入ってきた！」と声を荒げてみせた。副会長にとって、目的の古泉に
関わるもの全てが敵なのだ。

「あ、副会長だ！ 元気〜?」

副会長に手を振り、駆け寄ってハグするベネディクト。その隙に副会長との会話から逃れた青山が、前野の元に戻ってきた。

「前野さん、今のうちに逃げましょう」

「え、でも、ベネディクト君はどうするの？」

「ベネディクト先輩の背中を見てください」

背中？

何のことだと前野がベネディクトの背中を見ると、背中に『今のうちに逃げろ。by古泉』と書かれていた。成る程、と前野は納得。納得したが、疑問は浮かぶ。

「でも、どうやって逃げるの？ 入口には生徒会の人達がいるし、逃げられくない？」
窓から飛び降りたりするって言うなら話は別だけど。

前野は、この現状に引き攣った笑みを浮かべながら、最後にそう付け足した。

「良いですね、では飛び降りましょうか」

「は？」

しかし、青山からの思いがけない了承によって、前野は焦りを覚えるのだった。

ベネディクトは副会長をハグしながら「久しぶり〜」とディフェンスを続けているが、それも時間の問題。幸いにも今は生徒会の全員がベネディクトと副会長に視線を向けているから良いものの、いつその視線が前野と青山に向けられるか分からないからだ。

だから、急がなければならない。

飛び降りなければならない。

「ちよ、ちよつと待つて? ……本気で言つてる? 勉強のし過ぎで変になつちやつたんじゃない?」

「勉強のし過ぎで変になつたりはしません」

「いや、そんな真顔で返されても——兎に角、ここから飛び降りるなんて無理だよ!? ここ3階だから! 飛び降りたら最悪死んじゃうから!」

「大丈夫です。僕を信じて下さい」

真つ直ぐな瞳で前野を見詰める青山。その真剣さに前野は気圧され、一步後ろに下がる。窓際に近付く。

「いや、でも」

「3階から飛び降りても、無傷でいられます」

「本当に勉強出来る人の台詞!」

一步後ろに下がる。

窓際に近付く。

「なるべく早く、決断をお願いします。時間がありません」

「う、うう〜!」

頭を抱えながらも、一步後ろに下がる。

窓際に辿り着く。

「——分かった、分かったから！ 本当に大丈夫なんだよね！」

「ええ、お任せ下さい。ああ、あと、先程の言葉を訂正させていただくと、飛び降りるではなく飛び降りるです」

前野からの了承を得られたのを確認すると、青山は懐から重りがぶら下がった長い長い紐をマジックのようにスルスルと取り出した。長さ数十メートルに渡るその紐は、どうやら青山の胴体に巻き付いていたらしい。重りが付いている方とは逆の方の紐を首に巻き付けると、青山は「下がって下さい」と前野に注意を呼びかける。

言う通りに数歩下がった前野を確認すると、青山は重り付きの紐を回し始めた。遠心力を受けて、重りが綺麗な円を描く。やがて重りが風を切り、前野がその意図を問おうとした瞬間、青山は重りを窓の外に投げた。

遠く遠く、重りが見えなくなり、紐だけがシユルシユルと伸びていくのだけが見える。

ピンツ。

紐が張る。

「……よし、いけます」

「何が!？」

「理解が追い付いていないかも知れませんが、こうすれば分かると思います」

そう言うのと、青山は腕に巻き付けていた紐に滑車を通してみせた。滑車を通すと、腕

に巻いていた紐を窓枠に固く固く結び付ける。紐が真つ直ぐに張られ、どこか遠くの終着点へと繋がった。

「……まさか、滑車で降りるとか言わないよね?」

下る角度こそ緩やかなソレだが、校舎3階の高さから紐一本と滑車に全体重を預ける事に安心感を覚えることが出来ない前野が、小さな声でそう言った。

「降りますよ。この方法が一番早く生徒会から距離を離せます。彼等は都合良く滑車を持ち合わせていないでしょうし、追いかけてようとしても階段を使う羽目になりますから。——帰宅部の活動方針の一つ、覚えていきますよね?」

「……『より効率の良い帰宅を目指す』」

「はい、正解です」

青山が微笑み、前野の顔が強張る。コイツ、マジで下る気だ。そう言わんばかりに青山にジト目を向ける。

「では、失礼します」

前野が反論をしなかったのを遠回しの了承だと捉えたのか、青山が前野の腰に片腕を回す。平均より体重軽めの前野が意図も簡単に中に浮き、手足が宙でプラプラと揺れる。ついでに三つ編みも。

「他に持ち方無いの?」

「滑車はベルトの部分に接続するので、所謂お姫様抱っこは出来ないのです」

まあ、『一人で滑車付けて下れ』って言われる方が無理か。

前野は妥協を覚えた。

「——つて、お前等！ 何をやっている！」

背後から副会長の声が聞こえる。それとほぼ同時に、前野を抱えた青山が窓枠の向こうに跳んだ。

跳び降りた。

キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……。

二人分の体重により、紐は一時予想外のしなりを見せ、二人の姿を窓枠から隠したが、その後は颯爽と滑空。段々と遠ざかる前野の叫び声と共に、二人の背中を小さくなるのだった。

「クソ、やられた！ 会計、庶務、お前等はあの二人を追うんだ！」

副会長の命を受け、部室から退却する会計と庶務の女子二人。残ったのは副会長と、その後ろで存在感無さげに佇む、幸の薄そうな書記の女子。

「さて、ベネディクト。大人しくお縄についてもらおうか」

ボキボキ。指を鳴らしながらベネディクトに近付いてくる副会長。荒事は苦手なのか、その後ろで微動だにしない書記。

対峙するは、ベネディクト。笑顔だ。

「ねえ、副会長」

「何だ」

「目の前は何色？」

「いきなり何だ。金もあるし紺もある。そんなの色とりどりとしか——」

「違う。真っ白だよ」

直後、懐から無骨な懐中電灯を取り出したベネディクトが副会長の眼前にその先端を向け、電源を入れる。突然の発光（もしくは白光）を向けられた副会長は目を押さえ、一瞬怯む。ベネディクトはその隙に、副会長の隣を通り抜けた。ドアの前には書記がいたが、書記はベネディクトよりも怯んだ副会長に駆け寄って「大丈夫ですか!？」副会長！

「しっかりしてください！」と看護を始めてしまったため、障害にはならず。一時は帰宅部の過半数を追い詰めた生徒会だったが、惜しくも逃し、帰宅部は行方をくらませてしまうのであった。

帰宅部一同は帰宅できない。中。

古泉は、イライラしていた。

人相は悪いが形は整っている顔を歪ませ、通常時から鋭い瞳を更にギラつかせている。染めたかのように真っ茶色な髪色は、彼をよく知らない人間は『不良』だと形容するだろう。

「生徒会長め。なあにが『ぶ、ブレザーの中に鉄板を仕込むなんて校則違反よ！ 没収！』だ。お陰様で肌寒いじゃねエかよ……！」

制服のズボンのポケットに手を突っ込み、寒さに耐えるように背を縮こませながら、早歩きで廊下を歩く。お気に入りのブレザーが奪われた事と、自身が寒がりな事もあり。

古泉は、イライラしていた。

「ああもうクソ！ もう放課後だし良いよな!? 返してもらえないよな!?!」

ブレザーを没収されたのが、一時間目と二時間目の間の10分休憩時。それから放課後までずっとワイシャツで過ごしてきた古泉には、限界だった。

寒さの？

いいえ、イライラの。

部室に向かおうとしていた古泉は、進路を変え、生徒会室に。ワックスで固めた茶髪は歩いて風には靡かず、まるで古泉の生来の頑固さを表しているようだった。

歩く。

向かう。

到着。

眼前には、三年生に上がった古泉が今までに幾度となく世話になった生徒会室。こっちは没収されたブレザーを返してもらう身、ノックなんてお行儀の良い事はしなくて良いだらうとお得意の『オレは正しい理論』を振りかざしてドアノブを握る。捻ると同時に、乱暴に開いた。

「おい生徒会ちよ——」

「ああああああああああ古泉君のブレザー良い匂いですやクンクンクン周囲には粗暴に振舞っておきながらもポケットには紫陽花柄アジサイのハンカチとかポケットティッシュとか入れてるの可愛いです萌えですわあああああああ」

「……生徒会長さん？」

扉を開けると、室内には生徒会長一人。しかし、普段のような背筋をピンとして執務を行う姿はそこにはあらず、床に転がって古泉から没収したブレザーに顔を埋める変態

しかいなかった。目撃した古泉も、思わず敬語になってしまいくらいには混乱している。生徒会長は顔をブレザーで覆っているため、古泉の来室には気付いていない。ただただ痴態を晒している。

逃げようか。いやしかし、ブレザーを返してもらわなければ帰宅が出来ない。

数十秒間に及ぶ葛藤の末、古泉は生徒会長に声をかけることにした。よく考えてみれば、この痴態を目撃した古泉には非はない。扉をノックしなかったという非はあるにはあるが、古泉が声をかけても変態行動に没頭していた生徒会長の事だ。きつと、ノックしても気が付かなかったに違いない。

「……おい、生徒会長」

「何だかんだ理由を付けてブレザーは永久に没収にしてしまおうかしらそうしましょう自宅に飾って起床時に匂いを嗅いで一日を爽やかに過ごしましょう」

「テメエふざげんな！ 返しやがれこの変態会長！」

生徒会長のおんまりな独り言に耐え切れなくなった古泉は、つい生徒会長からブレザーをひん剥いて取り戻してしまおう。

目が合う。生徒会長のトロンとした瞳が段々と澄み渡り、ようやく冷静になったかと古泉が一安心したところで。

「キャアアアアアアアアアアアッ!!」

「どうかしましたか生徒会長！」

生徒会長が叫んだ。その直後、副会長が駆け付けて二人を順番に見る。

ブレザー片手に生徒会長を見下ろす古泉。

涙目で床に座り込む生徒会長。

「……古泉、貴様ア！」

「待ちやがれ！ テメエの頭の中でどんな結論に至ったかは知らねエが、多分だがその結論は間違——危ねエ！」

誤解を解こうと副会長に語りかけている途中、副会長から黒インクのボールペンが投げ付けられる。顔面ではなく太もも付近を狙っているあたり、まずは脚を負傷させて逃げられなくしてその後ボコボコにしてやろうという副会長の本気度が見て取れる。

「よくも……よくも生徒会長を傷物にしてくれたな！」

「血涙とかマジかよコイツ」

その後に「いや、傷物にしてねエし」とツツコミを入れた古泉だが、怒りで我を忘れていた副会長の耳には届いていなかった。

副会長がポケットからスマホを取り出し、どこかにかける。

「もしもし、俺だ。今すぐ生徒会室に来てくれ。これより、かねてより会議で具体案を練りに練って、どんな方法で帰宅部を地獄に墮としてやろうかという生徒会史上一番盛り

上がった『帰宅部掃討作戦』を実行段階に移す。……ああ、今からだ。途中で帰宅部の部員を見付けたら捕縛して構わん」

「おい待て、ンだよその物騒な話は！」

「黙れ！ これより貴様等帰宅部は生徒会公認の敵だ！ 何が何でも裁きを下してやる！」

指の間にボールペンを挟みながら、徐々に距離を詰めてくる副会長。

「……クソ！」

後ろを見る。生徒会長が誤解を解いてくれれば済む話なのだが、肝心の生徒会長は恥辱に耐えるように俯き、女の子座りでプルプルと震えている。古泉の事なんて見てすらいなかった。

数秒考えてから、決断。

無理だ。分が悪過ぎる。

古泉は毒吐きながら、窓の外へと逃走した。

☒

「——以上、回想ってか」

場所は変わり、体育倉庫。息を切らしながら、自嘲気味に古泉が吐き捨てた。空気も籠る、砂埃やラインの粉まみれの小汚い体育倉庫に、自他共に帰宅部1の綺麗好きである古泉が居るのには、理由があつた。

身を潜めているのである。

誰から？

勿論、生徒会から。

「今頃学校中大騒ぎだろオナ」

ブロック塀のような体育倉庫の壁。長年使われ続けたが故に隙間が出来たその壁を覗き、時々外の様子を確認する。幸いにも、生徒会の手は校舎外までは伸びていないようだが、やはりそれも時間の問題。前野や青山の行く末も心配だが、あの二人は後輩ながらも帰宅部の立派な一部員。ちよつとやそつとのトラブルでやられるような教育はしていない。古泉はそう結論付け、連絡を取る為に制服のポケットから出していたスマホを再び仕舞つた。

これからどうしようか。古泉はふと考えてみる。今回の問題が、1日や2日で解決する程度のモノではないことは古泉がよく理解している。あの生徒会長（もしくは副会長）の気が収まらない限り、役員は生徒会長の手となり足となり帰宅部を追い詰めるだろう。

「どオしたもんかね」

手を握って、開いて、握って。

この状況をひっくり返すような、帰宅部の身の安全も確保出来れば、生徒会との確執も取り除ける、誰の心にも負の感情が残らないような名案を。

古泉は、思い付いた。

しかし。

それを現実にする為には、一人ではどうしようも出来ない。

二人。

あと二人、古泉の名案を実行に移す為には、古泉の他に、あと二人必要なのだ。

アテなど考えるまでもない。古泉は連絡を取る為に、再度制服のポケットからスマホを取り出した。

☒

「大事ありませんか、前野さん」

「うん、大丈夫だけど、大丈夫なんだけど……」

手を差し伸べる青山に、手を伸ばす前野。前野の手を掴んだ青山は、地面に座り込ん

だ前野を優しく引つ張りあげた。

「どうか、致しましたか？」

ハツキリしない前野の様子に、その原因が思い至らずに首を傾げる青山。言える筈もなかった。

滑車で下り、紐が伸びた先の裏庭のケヤキの太い幹。最後まで滑れば幹に激突してしまふので、直前で滑車から降りて地面を滑るように着地。少しでも前野が怪我をする確率を下げたかった青山は、抱えていた前野の胴体を離し、砂場の方へと投げたのだ。いつその事派手に転んだり怪我をしてしまえば青山を非難出来るのだが、前野も帰宅部として少々格好が付くレベルにまで日々部活動を行なつてしまつていたので、勢いを殺す為に体操選手さながらの連続技で地面をグルグルと跳び回り、砂場の縁に綺麗に着席までしてしまつたので。

ここまで来てしまふとむしろ自分が女らしくないというか、感謝を述べて良いのやら丁寧に扱えと怒るべきなのか、回転技と一緒に脳までグルグルと回転してしまい、上手く台詞が回らなくなつているのだ。

「い、いや……何でもないよ。——それより、これからどうするの？ 生徒会が敵になるって、現実味こそないけれど、結構拙い事態なのでは？」

「確かに、学生の象徴とも言える生徒会が敵に回るとなれば、僕達は平凡な学生生活を送

れる事はまず無いでしょう。今日の内に何かしらの手を打たなければ、『帰宅部』自体の存続も危ぶまれます」

ズレた眼鏡の位置を直しながら、青山が前野の質問に答える。答えてから、前野の手を優しく包んだ。

「兎に角、移動しましょう。このままでは、ロープを辿って生徒会がやってくる可能性が高いので」

「……そうだね」

ベネディクト君は大丈夫なのだろうか。古泉先輩は、どこで何をしているのだろうか。前野なりに色々気になっている所はあるのだが、ひとまず、ここに居ては生徒会に見つかってしまう。青山の言う通り、前野は移動する事にした。

「そう言えば、どこに行くの?」

「体育倉庫です。先程の古泉先輩からの電話で、体育倉庫に身を潜めていると仰っていたので。そこに向かい、それからベネディクト先輩を救出しましょう」

「きゅ、救出って。ベネディクト君、捕まっちゃってるの?」

「はい。ベネディクト先輩も中々の強者つわものではありますが、副会長は別格なので」

「あの人、何か部活とか入ってたっけ」

「いえ、その……何と言いますか」

「どうしたの？」

「大変言い難いのですが……俗に言う」

「俗に言う？」

「元ヤンなのです」

「……ええー」

風紀の鬼のような副会長。彼がカツアゲや暴力等を働いてる姿を想像して、思わず苦虫を噛み潰したような顔をしてしまう前野。確かに、副会長がガタイも良いし、力持ちだし、顔もどちらかと言えば強面。納得と言えば納得だ、と前野は心の中でうんうんと頷く。

「前野さん。出来れば、立ち止まらないでいただけると助かります」

「……生徒会の人達に見つかっちゃうもんね。ごめんごめん」

「いえ、いざという時はお守りしますが、争いは無ければそれに越した事はありません。無駄を省き、早急に帰宅しましょう」

「そうだね」

大真面目に眼鏡を光らせる青山の言葉に、柔らかい声色で返事をする前野。

やがて体育倉庫前に到着。グラウンドの隅に存在するそれは、建設された当初よりもだいぶ色の落ちた壁色をしていて、所々ひび割れた壁の向こうから白線引きの粉の嫌な

臭いが仄かに香る。

青山は待ち伏せがないか周囲を念入りに確認してから、鉄扉に手を掛けた。

「では、開けます」

「う、うん」

ガラガラ。多少建て付けの悪くなった鉄扉を開け、埃の充満する室内を確認。

「……………、古泉先輩？」

この場所を指定した筈の張本人。生徒会から追われる原因となる『帰宅部』部長、古泉は、体育倉庫内から忽然と姿を消していた。

「な、何故……………」

青山がフラつき、壁に手を付いて額を押さえる。古泉という信頼すべき人間が予想外の行動をし、指示や計算で動く青山はショックを受けていた。何故、どうしてですかと古泉への問い掛けを虚空に吐き捨てる。

「青山君、落ち着いてっ。古泉先輩の事だから、何か理由がある筈。メールこそ来てないけれど、この体育倉庫の中にヒントが残されているんじゃないのかな」

日頃の、前野に執行される古泉のイタズラは何の理由も無いソレだが、しかし。前野は信じていた。あの古泉先輩が——悪巧みと人を煽動する謎のカリスマ性に長けている帰宅部部长は、大事な場面では何か意図を残す筈だと。必死に青山を励ますと、青山

も顔色を少し悪くしながらも何とか立て直した。

「———そ、そうですね。古泉先輩は偉大なお方。僕達が分かるような何かを、きつと残して下さっている。そうに違いありません」

「探そう！」

「はい」

埃を掻き分け、倉庫内へと入る。カラーコーンを退かし、器材を退け、奥へ奥へと進むと、壁に白粉でこう書かれていた。

『17時40分に、屋上で待つツ!!』

成る程。この、倉庫の最奥の壁ならば、入り口からは器材やらで隠れて見えやしない。カモフラージュは完璧ではないが、今日一日の中で完結する内容ならば問題は無い。無くなる。

メッセージを見た青山は、無言で腕時計を確認する。

「………現在時刻は17時26分。14分後に、屋上で何かが起こるといふ訳ですか」

「何で、屋上なんだろう」

「それは分かりません。ですが、古泉先輩に何か意図があるのは事実。僕達は、それに従いますよう」

「………そうだね」

そうと決まれば、次の目的地は屋上。また校舎内へと侵入し、生徒会にバレないように屋上まで進まなければならない。人目の付かないルート、生徒会を振り切って向かう最速ルート、階段を使わないルート。色々な行き方を考えて考えて、青山は一言、前野にこう言った。

「前野さんは、ここで留守番です」

「ええっ!?!」

「よう」

「待ちくたびれたぜ」

「帰宅部オレ等が生徒会から追われずに終われるには、こうするしかねえんだよな」
「だから、アンタに話がある」

帰宅部一同は帰宅出来ない。下。

4月の風が少し強めに吹き抜け、古泉の頬を掠める。風に靡く茶髪の髪は、元々はセツトされていたのだが、この心地よい風の所為で滅茶苦茶になってしまった。

場面は変わり、前野達がいる体育倉庫の近くの校舎の屋上。小泉は、転落防止の柵に背中を預けながら、ズボンのポケットの中をまさぐっていた。苛々しているのか、それとも別の理由があるのか。普段から悪いその目付きを2割増しでギラつかせている。

携帯を操作し、電話のコール画面へ。電話はすぐに繋がった。

「もしもし？ オレだ」

『古泉先輩！ あのメッセージは——』

「おう。考地か。つう事は、体育倉庫のメッセージは見付けられた訳だ。良かったな、何も調べずに電話してくるようなアホだったら、説教かましてたぜ」

古泉の軽口に、青山は『当然です』と電話越しに胸を張ってみせた。

『メッセージの意味は分かりましたが……まさか、あの技を使うのですか？』

「……ああ。上手く落ち合おうや」

そう言つて、電話を一方的に切る。別に、後輩に意地悪をしている訳ではない。流石の古泉も、場所と場合は弁えているからだ。

つまりは、古泉の前に現れた一人の女生徒。ここ一帯を吹き抜ける風が、女生徒の制服をはためかせる。

「見付けましたわよ」

屋上に、女生徒——生徒会長が姿を表す。

「遅かったじゃねえかよ、生徒会長さん」

「貴方が大人しくお縄に掛かっていたなら、もっと早く会えましたわ」

「はっ、そりや無理な話だ」

「その強気な態度、いつまで保つかしら」

「それはこつちの台詞だ」

「……どういう事でしょうか？」

簡単な話だ。古泉はそう呟いてから、指を天に向けて指した。

「これ以上近付いたら、生徒会長がオレのブレザーをくんかくんかしていた事を全校生徒にバラす」

無論。

古泉の普段の行い故に、実際にそんな事をタレ込んで相手になんかされないだろう。そして、聡明である生徒会長も、平時ならばブラフだと気付けた筈だ。

しかし、今は古泉にある現場を見られた事により精神的に不安定である事と、それが実行された場合の恥と失墜、実家に泥を塗って没落していくまでのシミュレーションを脳内で一瞬にして実行してしまったが故に。

故に、生徒会長は、事の重大さに「いやあああああああ——!!」と頭を抱えて叫ぶ。ブラフを見抜けずに、しゃがみ込んでしまった。

効果は靦面てきめんだったようだ。

「はっはっはっは！ 理解出来たんならそのブレザーをこちらに渡せ!! そしたら許してやらない事もないぜ？」

ズビシイッ！ と生徒会長に指を指す。

「……」

リアクション待ち。

しかし生徒会長は、何のアクションも見せずに俯いている。

「どうした？ いきなり黙っちゃってよ」

「……死にますわ」

「あ？」

「そんな痴態を晒す位なら、死んでやりますわあああああッ！」
「ちよ、ちよつと待て！」

言つて、生徒会長は古泉のブレザーを抱えて、走り出した。

しかし、その行き先はドアではなく。生徒会長の立っていた場所から左方向。即ち、屋上を取り囲むフェンスに向かつて。

「バカ野郎！」

慌てて生徒会長を追い掛ける。生徒会長は落下防止の策をよじ登り、向こう側へと身乗り出しそうになってしまっている。しかし、生徒会長と古泉。脚の速さは歴然で、数秒と経たずにその距離は縮まり、生徒会長の手をガツチリと掴んでみせた。

しかし、生徒会長の手を掴んだ頃には、無意識の内に自身も柵を飛び越えてしまつていて。

生徒会長の手を掴んだ事により、重心が前へと傾き、バランスを保てない。後ろ手で柵を掴もうとするが、スルリと手から離れていった。

「ヤツバ——」

一瞬で頭が真っ白になる。続く言葉も出なかった。屋上の柵が、スローモーションで小さくなっていく。

オレが面白半分で脅さなければこうはならなかったのではないか？

そもそも、校則をオレが破らなければ、こんな結末にはならなかったのではないか？

頭も景色も白ずんでいき、様々なパターンの後悔が頭を巡る。

⇒

おかしい。

「……あのー」

「何でしょうか」

「いつまで屋上見てるんですか？ 何も起こりませんけど……」

確かに、古泉が電話で青山に『上手く落ち合おうや』と伝えてから、5分が経過した。しかし、見上げた屋上には何も無く、その背景の青空ばかりが目映る。

「古泉先輩が見ていると言ったのです。見ていきましょう」

「恐ろしい程忠順ですね……」

「しかし、前野さんの言う事も一理あります。一度電話しましょうか」

先程通話をしたばかりの番号を選び、コールボタンを押した。それから、呟く。

「……成る程。そう来ましたか」

それから、一秒も満たない間に、青山は走り出した。

⇒

PLLLLL!

「——ッ!!」

思考が停止しかけた刹那。古泉のポケットから鳴り出した携帯の着信音。それが、古泉を正気に戻した。瞳から入る情報に色彩が戻る。

着信音はすぐに止み、自身の鼓動の音と耳に絡む風の音が、古泉の目を覚まさせる。そうだ。

ネガティブになってる場合じゃないだろう。

まだ結末じゃない。まだ、起承転結の起にもなっていない。

帰宅は、始まってすらいない。

古泉は生徒会長を引き寄せ、彼女が恐怖を少しでも和らげる為に強く強く抱き締めていたブレザーを取り戻す。幸い、生徒会長はフェンスを越えた辺りから恐怖のあまり気絶してしまっているらしく、古泉の行動を咎める者はいない。

生徒会長から剥ぎ取った自分のブレザーを着て、落下に備える。

風に揉まれ、ゆらゆらと回転しながら落下している生徒会長。彼女はどうかつて？

「無茶が過ぎますよ、全く……」

古泉がブレザーを着たのとほぼ同時に、『空翔ける帰宅部』で壁を走ってきた青山が生徒会長を捕まえ、お姫様抱つこの体勢に落ち着かせる。最高だね！ ベネディクトがこの場にいたなら、笑顔でそう言っただろう。

「じゃあ、あとは頼んだぞ」

古泉は青山にそう言ってから、背中を下に向ける。予測落下地点には、学生達から『ちよい森』と呼称される、グラウンド一つ分くらいの面積に隙間無く生い茂る緑色の木々。古泉は今背中から落ちている為、運が悪ければ背中から枝に突き刺さるが。

お忘れだろうか。古泉のブレザーには、鋼が入っている事を。

バキバキバキバキツツ!! と全方位から枝の折れる音が。背中を守れても、剥き出しの顔や、布何枚かしか纏っていない四肢は、枝の猛威に曝される。剣山のように待ち受けた木々の枝が、古泉の身体中に傷を付けながらも落下の衝撃を段々と吸収していく。木の枝をしならせ、折り。そして他の木の枝が古泉の体を受け止め、しならせ——そんな事を繰り返せば、いつの間にか枝の密集地帯を抜けていた。

地面に背中から着地。しかし、木々によって殺された衝撃は、木から地面までの高さ

の衝撃しか残っておらず。古泉は屋上からの落下死をまぬがれたのだった。

……とはいえ、地面に背中から着地している訳で。重い衝撃が体内を駆け巡り、古泉から呼吸機能を数十秒間奪う。呼吸が戻っても、その痛み故に危うく嘔吐しそうになるが、流石にそれは絵面的にまずいので必死に我慢。

「…………ふはあ」

身体が落ち着いたのを確認して、大きく息を吐く。久々にこんな無謀なアクロバットを決めたなあ、と古泉は思った。

近くに、生徒会長を腕に乗せた青山が着地する。着地の際に近くの木々を跳び回って衝撃を分散したからか、その着地は古泉と違ってスマートだった。

青山に抱かれている生徒会長を見て、古泉は思う。

（本当なら、ブレザーを返してもらったら屋上から飛び降りて青山によいしょされる予定だったんだがなあ）

だって、自分で着地するの痛えし。

「サンキューな、考地」

「いえ、いつもの事です」

思えば、青山は損得感情無しに、俺の言う事を聞いてくれる奴だ。前野は言う事聞かないし、ベネディクトは気紛れだしなあ……。

『帰宅部』で一番人間が出来ているんだろう。

古泉は自分が出した結論に内心笑いながら、「それもそうだな」と言った。

良さ気な雰囲気にも包まれてはいるが、まだ問題は解決していない。

青山の腕の中で、眠っている生徒会長。そして、生徒会に捕まったベネディクト。

生徒会長が目覚ませば、また先程のように追い駆けつこが始まる。

ベネディクトの安否も分からないので、その確認もしないといけない。

文庫本で言えば、全体の半分を少し過ぎたばかりだ。残り100ページ余り、物語は続く。

まだ、帰宅は出来ない。

「あ」

古泉の隣にいた青山が、間の抜けた声を出す。

「どうした？」

「生徒会長、起きます」

「マジで……？」

視線を青山から生徒会長に移すと、もう身じろぎを始め、瞼を擦っている。

古泉が、どうやって生徒会長に今の状況を説明するかと悩んでいると、生徒会長がムクリと身体を起こした。それを確認した青山が、自立を促す。

ゆらゆらと少し揺れたが、数秒経ってから身体の軸が安定したらしい。瞬きを何度か行ってから、

「キヤアアアアアアア——!?!」

「うつせええええええ!!」

いきなり叫び出した。

「考地!」

このままじゃ堪らない。青山に合図をする。

「了解しました」

生徒会長の後ろに立っていた青山が、すぐに口を塞ぐ。もがっという声を最後に、生徒会長は言葉を発さなくなった。「うー、うー」と青山の掌越しに音だけが聞こえる。口を——正確には、顎を押さえ込んで強引に喋れなくさせたのだ。生徒会長は女性なので、簡単に来る。

「良いか、話を聞け」

「うー!」

「落ち着け。別にバラしたり殺バラしたりはしねえからよ」

「うー……」

音を出さなくなったのを確認し、青山が手をゆつくり離れた。

「その言葉に偽りはありませんわね？」

「当たり前だろうが」

「……分かりましたわ」

溜め息と共に肩を落としながら、抵抗をやめた生徒会長。果たしてそのため息の色は、落胆か、それとも諦めか。

⇒

「
」

体育倉庫で古泉と青山の帰りを待つていた前野。携帯をイジリながら待っていたその途中、何者かによって後ろから袋を被せられ、視界と手足の動きを封じられた後にどこかに連れ去られてしまっていた。目を隠され、身動きも取れない前野には為す術も無く。

今は耳から入る情報が全てなので、必死に周囲の状況を把握しようと耳を立てる。聞こえてくるのは数人分の足音と、男女ワンペアの声。（誰がとか個人までは特定出来ないが）混乱しながらもそんな風に頭に入れていた。自分の近くで慌ただしく話し合う声

を大人しく聞いていた。

「――よし、外して良いぞ」

そんな声と共に、前野の視界を遮っていた何かがゆつくりと外された。目に入るのは机が五つくつ付けられている、何かの集まりのような物。その机一つ一つに『生徒会長』『副会長』と名前のプレートが置かれている。まさかここは。

生徒会室？

怒っているのか、それとも笑っているのか、はたまた違う表情なのか。兎に角、ぱつと見て表情を感じ取れない、無表情とはまた違う表情で前野を見ている副会長が、窓際に佇んでいた。

ついでに言う、前野は椅子に縛り付けられていた。

「副会長」

「よう。また会ったな」

気さくに挨拶をしてくる副会長。てつきり怒っているとばかり思っていた前野は、少し拍子抜けしていた。

「さつきは女の子の声もした気がしたんですが」

「ああ。庶務には出て行ってもらった。この部屋にはお前と俺しかない」

成る程。

副会長の言葉に納得してから、辺りを見渡す。

「見慣れないのか。そりやそうか。お前は他の3人と違って優等生だもんな」

「恐縮です。……って、他の“3人”？」

「何が引つかかっている」

「いえ。古泉先輩とベネディクト君は、まあ分かるんですが、青山君は——2年生の青山君も、生徒会室に馴染みがあるんですか？」

「あー、あの七三の眼鏡か。あるぞ。アイツは古泉の側近みたいな立ち位置だからな。古泉居る所に七三あり。つまりは、古泉がトラブルを起こせば必然的に七三も一緒に居るといふ事だ」

「な、成る程……」

帰宅部の部室では、紳士然とした態度で前野に接する青山。確かに、前野とはクラスも違う。部活外での青山の事は何も知らない訳だが。こうして、正義を振り翳す側の人間からの口から発せられるクラブメイトの行いに、前野はイメージを崩されたような——言うならばニュースでアイドルの不祥事を知ったファンのような、愕然と信じられなさが一緒くたになって、前野に訪れていた。

「うちの帰宅部が、大変失礼しました」

気が付いたら、謝っていた。いや、普段から生徒会に迷惑をかけているのは帰宅部こちらな

ので、謝るのは当たり前なのだが。

「何だ。帰宅部にも謝れる奴が居たのか」

謝罪を受けて、心底驚いた様子の副会長。それを見て、自分以外の帰宅部メンバーの無法振りを再確認する前野。

目が合う。

見詰め合う。

それから、同時に笑った。

「お前は帰宅部の良心だな。よし決めた。部屋から出す事は出来ないが、縄は解いてやろう」

「私も、生徒会って帰宅部伝手づての情報の主だったので、もっと怖い方々かと思っていまして」

「今までどんなイメージだったんだよ」

「い、いやあ」

前野の脳裏に、生徒会メンバーが無関係の生徒に暴力を振るったり、予算を不平等に振り分けるイメージ図が浮かび上がる。

「言っておくが、帰宅部が話す生徒会俺達って9割以上嘘だからな」

前野の縄を解きながら、副会長が弁明する。実際に話して分かったその人間らしさ

に、前野は思わず笑みを溢していた。

「…………ふふっ」

「なんだよ」

「副会長つて、良い人なんですね」

「そうさ。俺は良い奴だ。——勿論、庶務だつて、書記だつて会計だつて良い奴等だぜ」
「生徒会長は？」

前野がそうやって問うと、副会長は誇らしげに言った。

「あのお方は、良い奴だなんて馴れ馴れしく形容は出来ないが……。素晴らしいお方だ。
なんて言つたつて、俺みたいなのをここまで連れてきてくれた」

「俺みたいなのを？」

そこで、前野の頭上に浮かんだ疑問。それは前野の背中に滑り落ちて、ぶるりと震わせる。

「あ、あの。質問良いですか」

「答えられる質問なら何でも答えてやる。どうした」

「副会長つて、元ヤンなんですか？」

先程、青山から寄せられた副会長の過去。その真偽を確かめる為、問う。

問われた副会長は、ニツと笑った。良かった、あの話は嘘だったんだ——

「ああ、そうだ。去年まではヤンチャしてたぜ」

そう言つて、前野に見せた喧嘩タコと古傷だらけの右手。そのシヨツキングな右手の真実に、前野は「キュー……」と喉を縮ませながら気絶してしまふのだった。

⇒

「おい、大丈夫か」

ペチペチ。頬を優しく叩かれている感触で目が醒める。目が醒めたら、副会長の顔が間近にあった。

「うあひやあー！」

「どうやって発音してるんだそれ——って、そうじゃないか。大丈夫か、帰宅部の良心」
普段の副会長と言えば、古泉に対して怒っているか、生徒会長から指示を貰つてニコニコしているか、先程の前野との会話での情が感じ取れない表情かの三つの表情しかないのだろうというのが前野の感想だった。しかし今の表情はその内のどれでもなく、突然倒れた前野を心配しているような表情だった。

大丈夫です。少し、副会長の手の傷にビックリしてただけです。そう伝えると副会長は、ホッと安堵の溜息を吐いてから、前野の頬を叩いていた右手を自分の身体で隠し

た。

「悪かった。こういうの苦手な人もそりやいるよな。配慮が足らなかつたよ。……本当に、悪かった」

言つて、頭を下げる副会長。心からの謝罪を受けた前野は、この人は誠実な人なんだなど。副会長への評価がグングンと上がっていくのが分かつた。

「そんなに気にしないで下さい。もう大丈夫ですから」

「そ、そうか……」

フオローは入れるが、それでも尚気にしてしまっている副会長。数秒項垂れてから、語り始めた。

「俺つて馬鹿でさ、生徒会に入るまでは、この古傷は栄光みたいなもんだと思つてたんだよ。喧嘩に勝つて、ドンドン増えていく傷が嬉しくて仕方なかつた。勿論、生徒会に入つてからは喧嘩する事も無くなつたから、傷は増えないんだが……やっぱり昔の考えが抜け切れてなくて、ついお前に見せてしまつた」

後頭部をポリポリと掻きながら、恥ずかしそうに言う副会長。前野は、思わず吹き出してしまつた。

「な、何だよ」

「ふふつ。気にしなくて良いつて言つてるのに、凄いい落ち込んでる副会長が何だか面白

かったので」

頬を褒める副会長。

太陽も段々と夕陽へと変わっていく時間帯。

「お前がそうやって振る舞ってくれて安心したよ」

「なら良かったです」

「……けどなあ。この右手を見て、また女子が怖がってしまったら、生徒会の名に傷が付くんじゃないか不安で仕方ないよ」

「傷が付くのは俺の右手だけで充分、なんてな」

「……何で俺の言う事分かったんだよ」

「いやあ、何となく言いそうな顔してたので」

「うわー、マジで恥ずかしいな」

照れる副会長。これ以上副会長を恥ずかしがらせては、何だか爆発してしまいそうだったので、前野はそろそろ自重する事に。

話を戻す。

「不安なら、何か包帯とか巻いたらどうですか？」

「包帯？ あー。それだと、怪我してるみたいで、いらん心配を掛けてしまいそうだ」

「じゃあ、グローブとか？」

「グローブか……」

グローブと言つても、野球とかボクシングとかのソレではない。

思案する副会長。その様子を見て、前野は何かを思い出してブレザーの懐に手を入れる。ガサゴソとまさぐつて、それを取り出した。

「……何でグローブが懐から出てくるんだ」

校則違反だぞ。と咎める副会長をまあまあと宥めながらグローブを手渡す前野。先程気絶させてしまった手前、あまり強気に出れない副会長はしぶしぶグローブを受け取つて右手に嵌めた。

「……俺が校則違反になるんじゃないか、コレ」

「生徒会長さんに事情を説明すれば大丈夫だと思えますけど」

「それもそうか……」

納得した副会長は、暫しの間グローブを嵌めた右手を握つたり開いたりして、感触を確かめている。

「……これ、いくらだ」

「気に入つたんですか？」

「ああ、嵌めてる内に段々馴染んできてな」

「じゃあ、あげます。お金は入りませんよ」

「良いのか？ 決して安くはなさそうな代物に見えるが」

「はい、良いですよ。私、革の手袋似合いませんし」

そう言った前野に、これ付けてヨーヨーとか持つてたら格好良さそうだなと男子らしい発言をしてみたいそうになる副会長だったが、寸での所で思い留まり、ありがとうと感謝で終わらせた。

「代わりと言っちゃ何だが、菓子でもどうぞだ。来客用に常備してあるんだ」

「わあ、嬉しいです。2人で食べましょう」

「そこに座っててくれ。今用意する」

副会長が指差した応接用のソファに座る前野（もう帰宅部を拘束する云々は前野には適応されないらしい）。副会長は用意すると言って部屋を出て、30秒ほど経過してから戻ってきた。

「菓子とか、毎日必要じゃない物は隣の生徒会準備室に置いてあるんだ」

「初耳です」

「ああ。札は真つ白だし、準備室の鍵も生徒会メンバーしか所持していないからな」

「なんか凄いですね」

「そうだろう」

胸を張る副会長。今日、キチンと対面で会話してから段々と仲良くなっている二人。

それに合わせて副会長が人間らしい表情を見せるので、前野はその様子が少し可愛らしく見えて、副会長に対して萌のような感情を抱いているのだった。

「菓子の好みが変わらんから、色々持ってきた。飲み物を入れてくるから、その間に選んでおいてくれ」

「分かりました」

「コーヒーか緑茶か紅茶か、どれが良い」

「緑茶をお願いします」

「温かいのか、冷たいのか」

「冷たいのでお願いします」

「おう。分かった」

ポットやグラスは生徒会室にあるらしく（皆毎日飲むらしく）、こちらに背を向けてトポトポと茶を注ぐ副会長。それを横目に見て、テーブルの上に置かれた数種類のお菓子を順番に見ていく前野。食べたいお菓子は、すぐに決まった。

「決まったか」

「はい。これが食べたいです」

「ほう、ハッピー○ーンか。良い好みをしている」

言いながら、袋を開ける副会長。

「本当ですか？」

「ああ。俺も好きだ、ハッピー〇ーン」

袋の中から、個包装されているハッピー〇ーンを一枚取り出し、得意げに笑う副会長。前野も続いて取り出し、自分の顔の前に出した。

「何だか、私達気が合いますね」

「全くだ」

それからは、お互い色々な事を話した。

古泉の横暴具合。

生徒会長の慈悲深さ。

ベネディクトがいかに自由か。

書記は勉強だけじゃなく、会議で出すアイデアも頭良さそうだとか。

青山の最近読んでる本の話。

庶務がどれだけ生徒会の為に働いてくれているか。

会計の弟が剣道で県大会に出場したとか。

等。

等々。

以前から友人だったかのように、談笑する二人。ハッピー〇ーンに手を伸ばし、迫る

最終下校時刻なんて気にも留めずに笑い合う。

テーブルの上のハッピー〇ーンも残り僅かとなり、最後の一枚を譲り合っていると、生徒会室のドアが勢いよく開けられた。その際に発せられた大きな音に驚いて振り返ると、そこには――

「生徒会長!」

「古泉先輩、青山君にベネディクト君も!」

「よう。随分と平和そうじゃねエかよ」

全員、共通して砂埃やら草木やらが制服に付着しているので、心配して立ち上がる前野。駆け寄るよりも先に、副会長が飛び出した。

「死ねえ古泉。パアンチッ! (帰宅部の良心風味)」

「危ねエ!」

ソファを踏み台にして、古泉に殴り掛かるが、古泉は風を切るほど速いソレをギリギリでかわして生徒会長の後ろに回って盾にする。

「卑怯な真似を……!」

歯噛み。前野から貰ったグローブから音が鳴るくらいキツく拳を握り締め、どうやって生徒会長をあゝの悪漢の手から解放しようか心算を立てていると、思わぬ所から静止がかかった。

「およしなさい」

「せ、生徒会長」

「貴方に暴力を振るって欲しくて、副会長に就任させた訳ではなくってよ」
「も、申し訳ありませんでした」

生徒会長が毅然とした声でそう言うと、副会長は背筋を正して片膝をついてから頭を下げた。

「そうかしこまられても逆に困りますわ。ほら、頭を上げなさい。次から気を付けてくれれば、私は別に怒ったりはしませんわ」

「はっ。ありがとうございます。これより、同じ過ちを繰り返さないよう、より一層自らを厳しく律していきます」

「なんだ。副会長様も、生徒会長ホスの前では可愛いワンちゃんだな」
「んだとゴルア！」

生徒会長の背中から離れ、ソファへと向かう古泉が、そう呟く。それを挑発と受け取った副会長は、すぐさま飛び掛かった。

頭を抱える生徒会長。この人も、色々苦勞しているらしい。

→

「帰宅部と生徒会は、正式に和解する?」

「何を仰っているんですか生徒会長! ……帰宅部の良心は例外として——コイツ等と和解しても、メリットなんて一つも無い筈です!」

ひとまず落ち着きなさいと生徒会長に窘められた副会長は、言われた通りにソファに座って落ち着いて話を聞く姿勢に入っていたのだが。

生徒会長の口から発せられた衝撃の内容に思わず立ち上がり、前野の方をチラツと見てから、他3人の帰宅部メンバーを順番に指差しながら主張した。

因みに、生徒会長と副会長以外の生徒会メンバーは、最終下校時刻が近い事もあり帰宅したようだ。

「いいえ、それがありますのよ」

メリット。

念を置くように、一語一句丁寧に言う生徒会長。

「……生徒会長の秘密が守られる、とかな」

「貴方は黙りなさい」

一小声で生徒会長に耳打ちする古泉。その脇腹を生徒会長が肘で小突く《イチチャイチャイしている》のを見て、副会長はキレた。

「……古泉イ。貴様、生徒会長に何をしたアッ!!」

腕を振るように伸ばす。すると、いつの間にか副会長の指の間に、一本ずつボールペンが仕込まれていた。手を握る度にカチカチと、ボールペンをノックさせながら古泉に近付く。

「これは、俺のお手製のメリケンサックだ。学校に居る時でも、万が一不良共に呼び出されたりしても対応出来るように制服に忍ばせておいているんだ！　まさか、これを貴様に使う事が出来るとはなア！」

「ふ、副会長。落ち着いて下さい」

「帰宅部の良心」

「は、はい」

「怪我したくなかったら、早く帰宅する事だな。生徒会長やお前には怪我をさせたくないが、このボールペンが届く範囲ならばその限りではない」

「え、ええ……う？」

辺りを見渡すと、青山はブレザーを脱いで飛来するボールペンから守る盾代わりになっているし、ベネディクトは生徒会長を執務デスクの下へと避難させていた。古泉でさえもファンディングポーズを取って攻撃に備えているので、どうやら、マジでヤバいらしい。

前野は、ようやく察した。

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて。失礼します。ハッピー〇ーン、美味しかったです」
「おう」

副会長は、一瞬とても優しい笑顔で応えてから、すぐに古泉を睨み付けた。その瞳には血涙が潤んでいる。

最早、彼は副会長ではない。生徒会長に手を出した古泉（副会長の妄想）を抹殺することを最優先に動くマシンになってしまった。

ようやく、待ちに待った帰宅の時間。

授業が終わってから今の今まで、ずっと待ち望んでいた帰宅は不意にやってくるので、前野はまだ頭がふわふわした状態で、鞆取りに部屋戻るかー。とか色々考えながら歩き出す。多分、校門を出た辺りで、帰宅出来る嬉しさの実感は訪れる筈だ。

前野はもう勝手にやってくれと言わんばかりに、この現状を他人事に考える事で精神を保ち、スタコラと退室する。その後ろを平然と付いてくる古泉。

「……どういう事ですか」

数秒経ってから、質問。古泉は、ヘラヘラしながら答えた。

「いや、何。あまりにもナチュラル過ぎて逆にバレないんじゃないか」

「そんな訳ないでしょう！ ああもう、ほら！ 副会長、走って追い掛けて来てるじゃない」

いですか！」

いつの間にか、歩行から走行に変わる二人の足取り。その後ろを、ボールペンを投げながら追い掛ける副会長。外はもうすっかり日が落ちてしまつて。前野の横を通り抜けた一本のボールペンの先が、蛍光灯の光を反射して煌めいた。

「何で私まで巻き込むんですか！　帰れそんな雰囲気だったのに！」

「お前だけ一人帰宅させる訳無エだろうが！　帰宅部は一蓮托生だつたうの！」

「古泉イイイイイイ！　待アアアアアエエエエエ！」

どうやら、帰宅するにはもう少し時間が掛かりそうだ。